

## 第8章 河戸堰の被災と復旧

万治元年（1658）頃河戸堰や宿毛総曲輪が築造されてから、現在の1996年までに338年を経過している。

その間には三度の南海道沖大地震の津波と何十回もあった洪水のために何回かは被害を受け、その都度復旧工事が行われたと考えられるが、その記録がほとんど残っておらず、その実態は不明のまま現在に至っている。

その資料不足のこの問題を、わずかの関連資料をもとに、地震による津波の被災と洪水の被災の二つに分けて記述し、その実態を少しでも解明したいと思っている。

## 第1節 津波による被災

土佐沖や紀州沖を震源とする南海道沖地震は、100～150年を周期として大古より起こっているが、河戸堰構築以後は次の三回である。

- ・宝永4年（1707）10月4日 亥の大変
- ・嘉永7年（1854）11月5日 寅の大変
- ・昭和21年（1946）12月21日

この三回の地震の津波を比較してみると

宝永地震 和田の奥、中角境付近まで  
 嘉永地震 現宿毛小学校正門付近まで  
 昭和地震 現宿毛警察署付近まで

であり宝永地震の時が断然大きく、昭和地震の時が一番小さかった。

同一地点で比較してみると、大鳥の<sup>はいなか</sup> 神社の石段は当時42段であった。（現在は最上に土を盛ってもう一段増しているので43段）

宝永地震 39段浸水  
 嘉永地震 7段浸水  
 昭和地震 0段（石段の最下位まで津波が来た）

河戸堰は松田川河口より僅か2.6kmの所にあり、大津波の影響はまともに受ける場所にあるので、昭和地震を除けばかなりの被害があってもよいのである。それら各津波の実態を資料からみることとする。

## 1. 宝永地震の津波

谷陵記 奥宮正明 宝永4年12月記

（宿毛分のみを抄記）

坂ノ下 亡所、山腹ノ家少シノコル（亡所とは全滅という意味であろう）

宿毛 亡所、汐和和田ノ奥或ハ牛ノ瀬川ヲ限ル。初ノ地震ニ土館民屋一時ニ転倒シ火災天ヲ掠ムル折節、高汐推入火災車輪ノ如クニシテ良ク波上ニ浮沈シ、後ニハ悉ク土居ノ前ニ漂イケルガ第三番ノ津浪ニ沖へ流レ出テ土居計残ル。

錦 家少シ流ル、田苑ハ海ニ没ス

此ノ外貝塚、大鳥、深浦、杵、宇薄、藻津

右悉ク亡所

小野家家譜（大鳥村の庄屋小野家の家譜）

「宝永四亥年十月四日、大ニ地、震動シ、山穿テ水ヲ漲ラシ、川埋リテ丘ト成、浦中ノ漁屋悉ク転倒ス、逃レントスレ共、眩暈シテ庄ニ打レ、或ハ頓絶セントスル者若干ナリ、係リシ後ハ、高潮入りナルヨシツブヤク所ニ、大津波打テ島中ノ在家一所トシテ残ル方ナシ、昼夜十一度打来ル、中ニモ第三番ノ津浪高クテ当浦鶴社ノ石垣踏段三ツ残」（石段は当時は42段であった）

浜田家古文書 口上覚

「宝永四亥年大変ニ付右新田（三代節氏の代に築いた新田1500石）悉破損潮入本知内も段々荒地ニ相成過分所務減を以代々勝手窮迫相成候」

とあり、その破損した新田の堤防を次のように記している。

一、錦口堤 長485間 地高175石 宿毛 両村  
 一、垣ヶ瀬戸堤 長39間 地高85石 大深浦村  
 一、福良口堤 長796間 地高200石 小尽村  
 一、志沢口池ノ浦堤 長159間 地高120石 大深浦 両村  
 一、片崎平五兵衛潮田堤 長79間 地高55石 大鳥村  
 一、仏崎より片島迄堤 長330間 大鳥村  
 一、中田堤 長112間 地高680石 大鳥村  
 一、ハダカ島堤 長56間 大鳥村  
 総地高 1315石

これらの新田は、すべて節氏の時代に海岸に堤防を築いて開いたものばかりであり、大津波が海岸を直撃して破壊したのである。内陸部の宿毛総曲輪の大堤やその他の堤防は含まれておらず、その実態は不明である。

だが、次の嘉永地震の際の津波では、宝永の津波よりずっと小さかったにもかかわらず宿毛総曲輪の堤防がかなり破壊されており、さらに河戸堰の二番井流もこわれていることを考えると、宝永の大津波の被害が或程度宿毛総曲輪や河戸堰にも及んでいたことは間違いないと考えられるが、その資料がないので今は具体的にそれにふれることはできない。

谷陵記の著者奥宮正明は安芸郡出身で藩の下役人、谷陵記は藩内各地の津浪の状況を記したものであるが、宿毛のみを特別に詳しく記したわけではない。実際に宿毛に足をのびて調査したかどうか不明である。地元での実状調査の資料がないため、宝永大津浪の実態がなかなかつかめなわけである。

間城龍男氏（もと宿毛測候所長）はその著、『南海地震津波土佐』の中に宿毛付近宝永津波侵入図として次のような図をのせている。

その図にある松田川の津波の最先端は、中角の西部の一部や和田の小田方付近のようである。これは谷陵記の宿毛の記事「汐ハ和田ノ奥或ハ牛ノ瀬川ヲ限ル」をもとに書いたためと思う。

果たして津波の最先端はここであったか、他の記録をも加味して、もう一度別の角度から検討してみたい。

嘉永7年(1854)の大地震について記した宿毛山内家の公式記録『甲寅大地震御手許日記』の中に宝永津波と比較した次のような記事がある。

宿毛の市街地に津波が来た時の状況を書いた次に「宝永の潮に比べば七、八尺も低く来る」また嘉永の津波と河戸堰の関係については「牛ノ瀬川は潮至て高く、河戸関の上へ潮五、六尺も登り、已に大目屋松次舟荷積候俟に関の上へ登り、無難に下り」とある。

宝永の津波よりも7~8尺も低い嘉永の津波が、河戸堰の上へ5~6尺も上ったということは、宝永の津波は河戸堰の上へ12~14尺も上ったということになる。メートルに換算すると12尺は3.64m、14尺は4.24mであるので、約4mくらいである。

河戸堰の上を4mも越えたというのであるから大変な津波であったことがわかる。

宿毛土木事務所が調べたところ、河戸堰と二ノ宮の高田上堰(明治以降の構築と思われるもので石畳でおほわれた直線の堰である)の二つしか堰の高さは調査されていなかった。

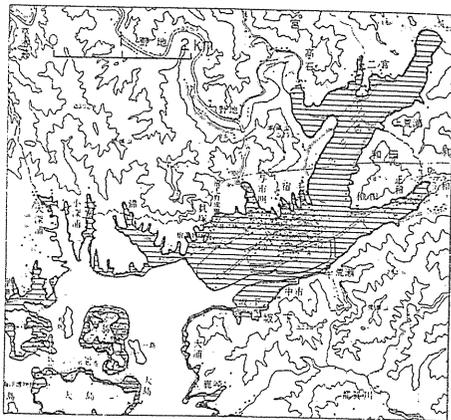
それによると河戸堰は海拔の基準となる平均水面(基本水準面)より1.70mの高さであるが、二ノ宮高田上堰は平均水面よりの高さは6.04mであった。

河戸堰の上4mを宝永津波が通過したとするとその平均水面よりの高さは5.70mとなり、二ノ宮高田上堰は当時はなかったが、その高さ6.04mよりは0.34m少なかった計算となる。だが津波は奥の狭い谷をさかのぼると高さを次第に増して行くので、仮に高田上堰が当時あったと仮定してもその堰をゆうゆうと突破して、その上流の小田方堰まで遡行したであろう。

小田方堰は二ノ宮高田上堰より500m上流にあって宿毛領主三代節氏時代に構築した堰で、その高さは1mくらいである。残念ながら平均水面からの高さを知るデータがないので二ノ宮高田上堰よりどれだけ高いかの正確な数値はわからないが1mを少し越える程度ではなかろうか。

そうすると津波の大部分はこの堰でさえぎられたが、一部は水越を通して更に上流に入ってきた程度であったと想定したい。

以上のような考察の結果、さきに示した間城龍男氏の宿毛付近宝永津波侵入図はほぼ正しいものと思われたのであった。



宿毛付近 宝永津波侵入図(間城龍男)

とにかく宝永の地震では、こんな大きな津波が来ながら、宿毛総曲輪や河戸堰の被害が全然記されていないのはなぜであろうか。嘉永津波にはかなりの被害があるので、宝永津波にはそれ以上の被害があっても不思議ではないのである。

谷陵記は、高知でまとめた情報をもとに記されたようである。宿毛の街は全戸倒壊のうえに全戸流失という大被害を受けたのであった。そのあまりにも大きな被害のおかげに河戸堰や総曲輪の一部、さらに海岸部に新田開発のために造った堤防の被害状況まで、地震直後は高知の方へは報告せず、そのため谷陵記には記入されず、被害が無かったかのような結果となったのであろう。嘉永津波の被害以上の被害が、当然あったものと考えられるが現在はその実態は不明である。

## 2. 嘉永地震の津波

嘉永地震での宿毛の実態は、『甲寅大地震御手本日記』に詳細に記されている。これは領主の命令によって、地震の日から11日間のことを日記としてまとめたもので、いえば宿毛領の公式記録である。その中にある津波の被害記事は次の通りである。

「果たして潮高相来潮音如雷、八反の大堤をも無手押通り一丈斗も高く田丁へ入、日入頃迄に御家中迄寄来候」

「右大潮にて川筋宛はなより錦口迄の間、長短の切十処斗有之、間数は不知候得共堤は三ヶ一も不残様に相見、尤与作池の石堤西の切潰入、ちと出水の時水越候、其他土居の堤初震に大破、二番井流も今春の御普請の処又潰入の由」

「大島浦は、潮は宮の雁木セツ涵り、洞泉寺の障子端迄潮登候也、潰家数不知、流家十三、四軒の事」

「錦村の堤、赤穂島の堤、内外共新井流志沢升田屋新田等一々切離候趣地下役より逐一進進候事」

「小尽浦より潮高く過、半流失、偶相残者も往来筋は二階迄も汐来候得共、怪我人は無之旨、逐一進進候事」

とある。

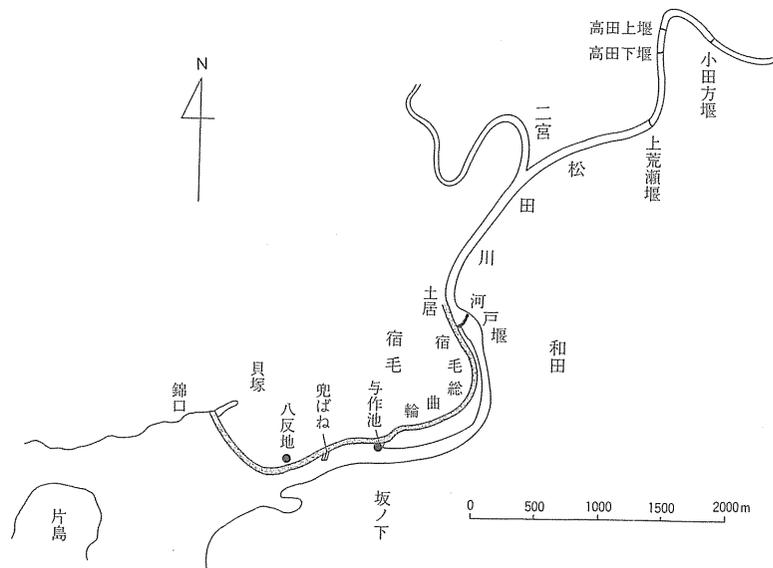
宿毛総曲輪では、八反の大堤を押通って水田内に入り、兜ばなより錦口までの間に10か所ばかりが切れ、与作池の西の石堤も潰れ、河戸堰の二番井流も被害を受けている。

八反は八反地のこと、兜ばなは兜ばねのはのことか、与作池も含めてそれらの地名を図示してみると別図のようになる。

宿毛総曲輪で堤が決壊したのは直接宿毛湾に面した与作池から錦口にかけてである。それはV字形をした宿毛湾の最奥部にあたるので、津波の大きさも強さも一番激しかったためであろう。

それに反して河戸堰の被害が全然記されていないのは、松田川河口の荒瀬に来た津波は一度和田平野に広がるため、和田平野の西岸にある河戸堰には津波の破壊力がそこに集中しなかったからではなかろうか。

なお津波によってその堰が攻撃されるのは上げ潮、下げ潮を含めて断続的であるが、洪水の場合は1日中、或は2~3日にわたって連続的な攻撃を受けるため、洪水の場合が堰の破壊力が強く、津波の場合は潮の高さに比して割合に破壊力が小さかったのかもしれない。



松田川下流 総曲輪と堰

こう解釈すれば、宝永津波、嘉永津波ともにその被害が記されていない点が判るような気がするのである。

### 3. 昭和津波

この津波では中新田から片島の鷺州橋間の道路のコンクリート舗装が津波で浮き上がった程度で総曲輪にはほとんど被害はなかった。

河戸堰にはそのすぐ下までは津波が来たが堰にはあがらなかったで、その被害は全然なかった。

## 第2節 洪水による被害

土佐は日本での最多雨地の一つであるが、その大きな理由は台風の常襲地である点にある。

万治元年（1658）頃の河戸堰構築後よりごく最近までの間で、幡多西部を襲撃した台風による大洪水を、中村市史、宿毛市史によって次のように年表にまとめてみた。

ここに出したのは大洪水ばかりで、これらに次ぐ多くの洪水はすべて省略した。この表だけ見てもいかに大洪水の多い地であるかがよくわかると思う。

### 1. 幡多西部の大洪水年表（中村市史、宿毛市史より）

1658 万治元・8・19~20 幡多郡九千石損田 流家347

1659	万治2・9・20	中村岩崎堤防決潰 中村町流失
1666	寛文6・7・6	岩崎堤防決潰 中村町は川原となる
1702	元禄15・7・28	寛文6年以上の大水
1721	享保6・7・5~15	50年来の大水
1722	享保7・6・23	前年に倍する洪水
1757	宝暦7・7・26	台風、大雨、洪水
1765	宝暦12・6・26	丑寅の洪水以来の大洪水
1781	天明元・8・23	山潮、大洪水
1786	天明6・7・27~29	30ヶ年以來の大時化
1822	文政5・5・29	洪水のため郡役所移転
1846	弘化3・3月・6月・7月	年間数度の洪水 丙午の洪水
1849	嘉永2・9・11	古今稀なる暴風雨
1858	安政5・7・13~14	大風、雨、洪水
1865	慶応元・1・6	安政5年以来の水
1870	明治3・9・7	嘉永2年以来の水
1886	明治19・8・20~21	平水より8.94m増水、大被害
1890	明治23・9・11	最大の洪水、入田の堤防が切れ四万十川の水が山田、平田方面まで逆流する
1894	明治27・9・10~11	幡多西部暴風雨
1896	明治29・8・17~18	幡多西部洪水
1899	明治33・8・23~24	暴風雨
1907	明治40・9・6	暴風雨
1911	明治44・8・15	平水より8.03m増の洪水
1912	大正元・9・23	昨年8月15日の洪水と大差なし
1920	大正9・8・15	山崩れの被害大、松田川堤防決潰
1931	昭和6・10・13	九州、四国南部を掠めた735ミリの台風
1935	昭和10・8・28	明治23年以来の大洪水、入田堤防決潰 四万十川の水は平田方面まで逆流
1943	昭和18・9・20	土佐清水に上陸した強台風
1945	昭和20・9・17	枕崎台風、県西部に被害大
1946	昭和21・7・29	豊後水道北上、昭和10年以來の大洪水
1951	昭和26・7・1	宿毛、清水間に上陸、大雨による被害大
1954	昭和29・8・18	豊後水道より宿毛、宇和島間に上陸
1963	昭和38・8・9	古津賀堤防決潰、中村市の被害甚大
1964	昭和39・9・25	大隅半島上陸後、宿毛地方に再上陸
1972	昭和47・7・23	豊後水道より佐伯にぬけた台風、宿毛の被害大
1975	昭和50・8・17	宿毛に上陸、被害大

2. 洪水による宿毛の被害

これだけ多くの大洪水があるのに、台風による宿毛の被害が記録に残されているのは極めて僅かである。なぜその記録が少ないかその理由を考えてみた。

- ①伊賀家の公式記録は、明治初年の東京移住の際処分をしたり散逸したりでほとんど無くなった。
- ②宝永・嘉永両度の地震の際の火災や津波で宿毛の侍や町人たちの記録もすべて無くなった。
- ③家臣の家も明治以降、他の地に移住した家が大部分であったので、記録類は残らなかった。
- ④わずかに宿毛に残った家は、大正9年の大洪水で浸水、そのため保存できなかった。

以上のような理由で宿毛には災害の記録が極めて少なくなったのであるが、ただ一つ貝塚に居住していた浜田家には少しの記録が残っている。先に引用した『甲寅大地震御手本日記』や、宝永地震の津波の被害を記した資料などがそれである。

浜田家は、伊賀家の御側役として記録をとったり、御免方見習として年貢割当の事務を行う人もいたので、それらの文書を保存していたり、提出した文書の写しを所持していたのであるが、その居住地が貝塚の丘であったので水害にもあわずに現在までそれらの資料が残っていたのである。

浜田家やその他の断片的な資料から宿毛の洪水の被害の記録を出してみる。

(1) 浜田家文書からみた洪水の被害

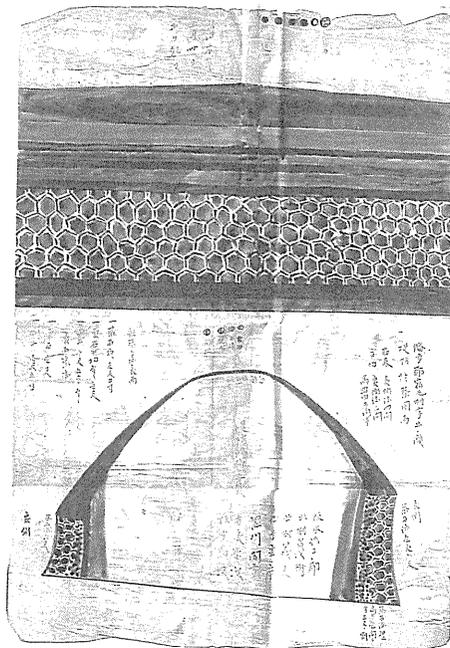
- ・天明7未年(1787) 領分の内山潮
- ・文化元子年(1804)7月 領内風雨洪水損毛
- ・文化4卯年(1807)9月 領内風雨洪水損毛
- ・天保13寅年(1842) 大風雨に付大井流水越等切通しに相成候
- ・弘化3年(1846)7月9日 大風雨居宅倒家と相成候

以上の記録があるだけで河戸堰の被害については全然記録されていない。

(2) 明治20年6月の牛ノ瀬堤防の修築

宿毛の林家には明治20年5月30日に起工した牛ノ瀬堤防の修築図が保存されている。おそらく明治19年の大洪水で破損したのを修理したものと思われるが、その被害状態はもちろんこの堤防が、総曲輪の大堤であるのか牛ノ瀬の渡し場近くにあったハネの堤であるのかさえわかっていない。

上図は側面図であり、下図は断面図である。



明治20年牛ノ瀬堤防修築図

(3) 明治43年、川戸水門の破損か所復旧のために改築(竹村照馬 宿毛町史稿)

これは明治42、3年頃の洪水による破損と考えられるが、その洪水の年号及び被害の程度等は全然記されていないので不明である。

(4) 大正9年の大洪水

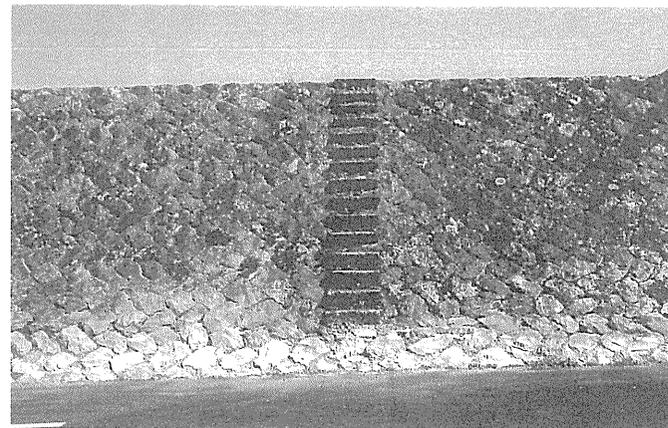
これについては竹村照馬氏の『宿毛町史稿』や、わたしも参画した『宿毛市史』にもかなり詳しく報告されており、その後も当時の経験者数名から、かなり詳細な話を聞いているので、それらを総合して下にまとめてみる。

「大正9年8月14日から降りをはじめた雨は15日午後2時には豪雨となり、5時頃より雷鳴をともし盆をくつがえしたような大雨となって、いたるところに山崩れが起り、9時には松田川がはんらん、山崩れで押出された材木によって次々と橋が押流され、それらの材木や橋が県道の松田川橋にひっかかり、そのために松田川の水位は急上昇した。

その水が松田川橋のすぐ上流右岸(宿毛側)の堤防を越えて一斉に宿毛側に落下して下流に向けて流れ、宿毛の大堤(総曲輪)を内側から直撃した。そのため大堤はついに決壊し、松田川の水はそこから宿毛の町々に渦を巻いて流れ込んだ。その堤防の決壊した場所は「堂の前」近くの小字「松右衛門屋敷」の所である。その地にあった百々鶴楼外4楼が瞬時に流失、その他の家屋も浸水、倒壊、流失が相つぎ、全く目もあてられない惨状となった。

この大洪水の宿毛町と和田村の被害は次の通りである。

町村	人の死	家畜の死	家屋の流失	橋の流失	堤防の決壊
宿毛町	42	7	29	26	18
和田村	16	0	7	25	22
計	58	7	36	51	40



大正9年改修の宿毛大堤